

8. 5 まつるアンケート抄-①私のお祭り体験?-

Facebook&twitter（現X）「とある民俗学講師の補足メモ」

- ・まつりの前近代：周期化・集団化・定式化した呪術としてのまつり、義務というより権利としてのまつり
- ・まつりの近代／現在：ハレ（非日常）／ケ（日常）区分の曖昧化、コミュニティとまつりの変容（町おこし、観光化…）
- ・まつりをめぐる多様な主体：男と女、大人と子供、家格の高下、ウチとソト…、その「働きかけ」に応じた意味と機能
- ・「おまつりを続いていること」はそれを支えるコミュニティのバロメーター

【花まつり】生まれ故郷の島根県鹿足郡津和野町では、毎年4月8日に近い日曜日、「花まつり」をします。お釈迦様の誕生を祝うもので、小さい子供たちが特別な格好をして町を練り歩く稚児行列が行われます。私もしましたが、変わった服装が気に入った一方、着付けが大変で、しかも長い間練り歩かなければならず、帰った時はヘトヘトでした。

【曳山祭】滋賀県長浜市には、毎年4月、ユネスコ無形文化遺産にも登録された「曳山祭」がある。羽柴秀吉が男児の誕生を祝って町民に金を振る舞ったのが始まりとされている。1番の見どころはやはり「子ども歌舞伎」だ。5~12歳位までの男の子が、豪華絢爛な曳山の舞台で演じる歌舞伎は、子供とは思えないほどの迫力があり、引き込まれる。笛、太鼓、摺鉦（すりがね）を用いて演奏される「しゃぎり」というお囃子も見どころだ。私は13基ある山の一つ「孔雀山」に所属して、笛を演奏したことがある。笛を吹きながら練り歩くのはとても疲れたが、それ以上に楽しかった。

【兵主祭り】滋賀県野洲市の兵主神社で5月5日、兵主祭りがあります。各地区の神社から兵主神社へ神輿を運ぶ行事です。重い神輿を担いで自分の地区を回った後に神社まで行くので、本当に疲れるものです。兵主神社の門前にある橋の前まで来ると、神輿を運んでいた小学6年生の1人を神輿に乗せて、大人たちが掲げるよう高く持ち上げます。そして、神輿の上段についている鳳凰を手に取り、上に掲げます。「うの取り」呼ばれる一番の見せ場なので、みんなで精一杯掲げました。当時小学生だった私としては怖かったのですが、しっかりと掲げないと友達や酒を飲んだオッサンから「高いところが怖いビビり」なんて言われるので、どんな子でも頑張っていた記憶があります。

【山笠祭】地元の福岡市では、山笠を担ぎ街を練り歩くお祭りがある。担ぎ手は全員男性で、女性は前準備を行うなど、性別で役割が分かれる。子ども山笠は、低学年までであれば女子も担ぐことができるが、担ぎ手は法被に褲という格好のため、女児への盗撮を防ぐため、保護者同士が手をつなぎ山笠の周りを取り囲む決まりになっている。そこまでやるなら子ども山笠も男児だけに限定すればいいのにと常々思っていた。これも時代に即して変わっていくものなのだろうか。

【祇園祭】私は祇園祭にほぼ毎年参加しています。中でも印象に残っているのが、小学六年生のときに、家の近くの長刀鉾の曳き初めをしたことです。学校の同学年の人たちで曳くもので、たくさんの人間に写真を撮られ、かなり緊張しました。距離も結構長く、かなり重かったので大変でしたが、とても貴重な体験となりました。

【天神祭】私が最も思い入れのある祭りは、日本三大祭りの一つ、大阪の天神祭だ。10歳のとき、「牛引き童女」という重要な役目を任され、緊張しながら十二単を身につけ、ゆっくりと牛を先導し、祭りの伝統を担っている実感が湧き、誇らしい気持ちになった。地元の屋台の手伝いも経験し、普段は話さない大人とも自然と会話が生まれ、祭りが地域をつなぐ大切な場であることを実感した。大学生になってからは、活気あふれる「ギャルみこし」を友人たちと力を合わせて担ぎ、祭りの熱気を全身で感じている。天神祭は私にとって「見る」ものではなく「一緒に作る」行事である。

【ねぶた】東京都世田谷区桜新町では毎年ねぶた祭りが開催された。青森県と協力してのもので、4車線道路を通行止めにして、道幅いっぱいに広がる大きなねぶたがいくつも来た。ねぶたとともに踊り子が鈴をつけて踊るのだが、一緒に踊ったり、お手伝いをすると鈴が貰える仕組みになっており、子供達がその場で祭りに加わった。

[夏祭り] 私の育った神奈川県横須賀市ハイランドには夏祭りがあったが、豊穣を祈るといった意味合いは皆無で、地域交流の場という面が大きかった。ハイランドが戦後に開発された住宅街であるためと考えられる。私の属していたハイランド三丁目は、地域の児童とその親で組織したこども会が、神輿を担いだり、出店を開いたりすることもあった。

[秋祭] 小学生の頃、愛媛県伊予市の秋祭りに参加した。本来、秋祭りのお神輿は男子のみが担ぐものだったのだが、人手不足により小学校の高学年になると女子も担がされていた。正直に言うと担ぐのは嫌だったので、今になればいい経験だったのだと思う。一軒一軒回った家からお菓子を頂けるのだが、上級生が下級生に少なめにお菓子を配って、お菓子を余らせ、自分たちがたくさん貰うという悪習があった。今でもそのずるがしこい風習は残っているのか気になる。

[津祭り] 幼稚園の年長だったころ、三重県津市で10月に開催される「津祭り」の唐人踊りに参加した。唐人踊りは、異国への憧れから外国人の姿を真似たことが始まりで、その後、朝鮮通信使を模したものへ変化していったとされている。唐人踊りでは、喜怒哀楽を表す面をつけ、赤や黄色の上着、虎皮模様のズボンをまとった人々が、太鼓や笛の音に合わせて歓喜の舞を披露する。幼稚園児だった私は、見慣れない派手な衣装と聞き慣れない音楽にどこか魅了された。

[千田祭] 私の地元の和歌山県有田市では、千田祭が行われる。千田神社にまつられている神様が喧嘩好きであることから、神前に供えられた6枚の鯛を奪い合う、荒々しい祭りとなっている。鯛を手にすると一年間大漁といわれ、私の祖父は傷だらけになりながら鯛を奪いに行った。私は子供ながらに祖父の怪我を心配していた。

[だんじり] 地元の岡山県津山市上河原陵南町では、毎年11月中旬の夜、秋祭りとしてだんじりがあります。近くの町内会4つほどが同時にだんじりを曳いて、同じ神社を目指すものです。小学生低学年までは、だんじりに乗って鐘を突いたり太鼓をたたいたりしました。小学4年頃からは、おじいちゃん達と一緒にだんじりを曳きました。私たちの代が一番子どもが多く、年に一度、おじいおばあが本気になる一大イベントでしたが、今では子どもが減ったのに加え、熟練のおじいおばあがどんどん死んで、規模が縮小され、だんじりの飾りつけもどんどんショボくれてきて寂しく感じます。

[ごくまき] 毎年12月第一日曜、奈良県吉野町西谷の春日神社で行われる「ごくまき(餅まき)」に参加していた。もともと厄払いの神事である「散餅の儀」が由来とされ、餅を撒くことで「災いを払い、福を分ける」そうだ。ここのごくまきは少し変わっていて、食紅で書かれた番号の景品との交換出来るお餅や、「かさごく」という大きい円盤状のお餅が撒かれる。前の方は力の強い大人の男ばかりが集まっているので、母には「前に行ったらアカンで」と言われていたが、私は大きいかさごくがどうしても欲しかったので、いつも前に突っ込んでいた。今考えると、大きな怪我がなくて良かった。

[時代祭] 今年の時代祭、アルバイトとして行列に加わり、時代衣装を着て歩いた。衣装を身につけた瞬間から普段と全く違う感覚になり、鏡に映る自分が別の時代の人物に見えて少し不思議だった。待機場所では、学生や観光関係の人、市の職員など、さまざまな人が同じ衣装を着て並び、普段は交わることのない人たちが一緒に一つの流れを作っているのが印象的だった。本番は思っていた以上に体力を使い、衣装の重さや寒さもあってかなり大変だったが、沿道から手を振られたときは自然と気持ちが高まった。観客として見るのとは全く違う景色で、「祭に参加する」実感が強く残った。

[文化祭] 私が在籍した奈良市の男子校の文化祭で人気を博していたのが、美少女コンテストである。女装した男子生徒の中から投票により勝敗を決め、最終的に勝ち残った人が優勝となる。その後、イケメンコンテストの優勝者と「結婚」する。このイベントは多くの生徒から人気があったが、学校側は「1番の美少女を決めるという行為は問題がある」と変更を求めた。これに対し、「理由が不十分」「学生の自由を重んじるべき」といった意見を持つ学生も多く、対立が生じた。生徒は「内輪ノリ」が大事なのに対し、学校側は「外部評価(外的リスク)」が大事だったのでないかと感じている。